

葦原検校の足跡

大浦 宏勝

日本医史学雑誌第五十一巻第一号 平成十七年一月三十一日受理
平成十七年三月二十日発行 平成十七年二月十七日受理

〔要旨〕 葦原検校は、江戸時代後期に『鍼道発秘』を著した盲人の鍼医であり、天保三年より十一代将軍・徳川家斉の侍医となり、諸大名を治療しその実力を認められる。また、彼は木曾義仲の末裔として、没落した木曾家の再興を果たし厚く祖先を供養した。その足跡を『木曾氏家禄』に基づき調査した。

キーワード——葦原検校、『鍼道発秘』、徳川家斉、木曾義仲、『木曾氏家禄』

一、はじめに

葦原検校は、『鍼道発秘』^①の著者として知られるが、その詳しい業績および履歴については、あまり知られていないのが実情であろう。すでに、横田観風は『医道の日本』^②において、群馬県北橘村には、木曾三柱神社内に葦原検校木像が安置されており、葦原検校の子孫が住み、墓所が存在することを報告している。これにておよその略歴は明らかにな

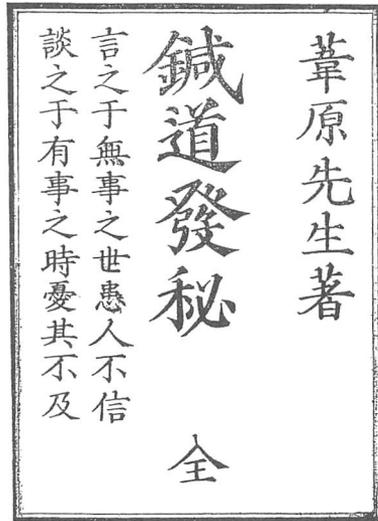


写真 1 『鍼道發秘』とびら

った。その後、町泉寿郎は『漢方の臨床^③』において、北橘村の木曾家に伝わる『木曾氏家禄』ほかの古文書類^④が存在し、赤坂に在った葦原檢校邸の見取図^⑤を紹介し、葦原檢校の経歴をまとめている。

今回、この『木曾氏家禄』に基づき、全国各地に存在する葦原檢校の足跡を調査して回った結果、『木曾氏家禄』の信憑性が確定し、遺跡および新たな木像の発見があったので報告する。

一、葦原檢校の略伝

葦原檢校は、幼名を造酒太郎といい、寛政九年（一七九七）四月十一日、江戸桜田において誕生した。父は木曾忠太夫義富、木曾義仲の二十七代目末裔に当たる。慶長五年（一六〇〇）木曾家改易の後、先祖は諸国を遍歴し、義富もまた家再興を願いつつ、文化元年（一八〇四）二月十八日、江戸にて没した。造酒太郎は七歳の時、麻疹を病んで失明^⑥。岸村檢校の門に入り、剃髪して「英俊」と名を改めた。金子勾当、村井快悦を初めとして、鍼家の諸流を試みて後、坂幽玄法眼（奥医師）を師として鍼術を修業する。幼年より真田家へ出入りして鍼治をなし、文化十年（一八一三）、英俊十^⑦七歳）七月の時、初めて真田居城・信州松代へ随従。文化十一年、江戸に帰りて後、真田家より扶持を与えられ、衆分（盲官の名称）に加えられる。

文化十二年六月二十四日、師の坂幽玄法眼より「鍼術免許」を受ける。以後、たびたび真田公に随従して松代へ行き、広く鍼治を施している。当道座内においては順次官位が進み、文政三年（一八二〇）五月に勾当となり、養母方の

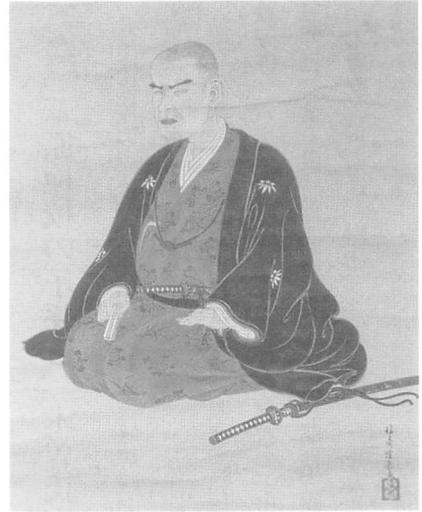


写真 2

家名を以て「葦原勾当」と号し、文政四年十月には検校となる⁽⁹⁾。文政六年一月には四度目の松代随行をし、広く五千人に及ぶ里人に鍼治を施す。これにより里人らはその恩に報いるため彼の木像を作り、虫歌観音堂内に安置した。江戸にては、一橋家、尾張家、紀伊家などの御館に鍼治を以て出入りしその技量を認められ、文政十二年には当道座の坊主・岸村検校の病死により、門中の者みな葦原検校の弟子となる。

天保二年(一八三一)は葦原検校にとつて、運命の転換点ともいふべき重大な年となる。この年七月には『鍼道発秘』を編み、門人および鍼術の志厚き者にこれを授けた⁽¹⁾。そして十二月には、將軍家齊公および家慶公に初めて御目見えする。その後、天保三年九月に奥医師並を仰せ付けられ、大奥御用も勤めるほか、多くの諸大名・家臣の治療にも当たり、名実ともに確固たる地位を築いてゆく。また、林大学頭述斎や松浦静山、井田赤城・信齋父子などの著名な文人たちとも親しく交わることになる。天保四年六月には帯刀免許を得、天保六年六月には検校の上座たる旨仰せ付けられ、天保七年十一月には奥医師となり、天保十年九月に家齊公が類中風の症にて倒れた際、鍼治し頗る効験あつたことから、十二月には法眼位に叙せらる。天保十一年九月には四十人扶持から二百俵高(御番料二百俵)へと加増された。天保十二年九月には、ついに当道座を離れ、表法眼席(寄合医師)に加わり「葦原源道」と名乗る。(後、天保十五年には「玄道」と改める。)当道座を離れたことにより、幕臣としての家督が発生した。

この間、祖先の業績の顕彰および供養にも尽力した。天保五年九月には、近江国粟津(現在の天津市)の義仲寺境内

に木曾義仲の遺跡碑石を建立。天保八年八月には、武藏国多摩郡世田谷領大蔵村に元祖・源義賢の古墳を整備し石標を造立。天保十五年三月には、下総網戸村（現在の旭市）東漸寺にて戦国時代を生き抜いた波乱の武将・木曾義昌の二百五十回忌追善供養として、諸侯諸家より和歌を集め『慕香和歌集』を奉納。後、嘉永四年（二八五一）に網戸村にて定雄の編となる『木曾殿御旧誌』発刊を助成した。^[1] また、長年の悲願であつた木曾家再興を果たすとともに、嘉永三年四月より、上野国勢多郡箱田村（現在の北橋村箱田）に住む木曾旧臣たちや村の木曾明神との交流が生まれ、幕末・明治に葦原檢校の子孫たちと深い関わりを持つ。

葦原檢校は、この木曾家再興後、安政四年（二八五七）十一月五日、六十一歳にて病死する。諡号は「一心院殿前侍医兼中務卿法眼方法日新居士」、鳴子常円寺（現、新宿）に葬られた。生前の安政二年には、鍼治門弟らの世話にて自身の石碑を常円寺に建立したと記載があるが、関東大震災と東京大空襲の二度にわたる荒廢の結果、常円寺には葦原檢校の碑はすでに失われている。^[2]

二、葦原檢校の子孫と『木曾氏家禄』

葦原檢校の妻は、長門国萩支藩の衣笠縫殿右衛門直次女。子供は、男子七人、女子一人いた。長男は秀太郎・義寛、次男は石川貞市の養子に出したが病により帰家し没（石川三之助）、故に正式な次男は久次郎・忠義（後、金之丞・義久と改名）、長女は義女ニよし（吹子ニおふき）、三男は鉄三郎・義信（後、駒之助↓賢次郎と改名）、四男は信四郎、五男は鉄五郎、六男は六之助・義方。葦原檢校の子供たちは早世した者が多い。秀太郎は二十七歳、三之助は二十六歳か、鉄三郎は二十一歳、信四郎は二歳、鉄五郎は五歳で病死した。

木曾家の再興は、当初、文武に秀でた秀太郎・義寛に託される。秀太郎は天保八年（二八三七）に元服し、將軍御目見えを果たす。軍学・学問・武術の御見分も済み、御番入願書も届け、小普請組大崎中務の妹との縁組も決まっていた

義富男
義長

幼名木曾酒造太郎ト稱ス寛政九年丁巳
四月二日己巳江都櫻田ニシテ誕生七歳ノ
時病ニシテ目暫ク閉檢校内ニ刺髪シテ
英俊ト改メ金子勾當村井快悦ヲ初トシテ
鍼家ノ諸流ヲ試ミテ後坂玄法眼奥州國
師ナリ
ヲ師トシテ鍼術ヲ修行是ヲ業トス幼年
ヨリ真田家エ出入鍼治ヲシ文化十一年月

写真 3 『木曾氏家禄』

とめ、木曾家再興に至る顛末を義寛および義久に綴らせたものであろう。⁽¹⁶⁾ 故に、安政四年十一月二十九日、葦原檢校を埋葬した時以降の記述はない。

その後の事情は、群馬県北桶村にある木曾家墓誌と『根井行雄伝』⁽¹⁷⁾、末裔にあたる木曾義一氏からの聞き書き（横田観風前掲論文）と義一氏記載の「家系図」に基づき補足する。この後、金之丞は元治元年（一八六四）九月に三十一歳で死亡。子供がいなかったため、弟・六之助・義方を養子に迎え、家督を継がせた。この時、義方はまだ十五歳である。

江戸幕府に仕えていた義方は、大政奉還後、幕府の倒壊により江戸にいられなくなり、明治五年頃、前述した木曾義仲の旧臣たちの住む上州箱田村に単身移り住む。最初、義方は木曾三社神社(18)の宮司として招かれたが、これを嫌い玉匣（タマクシゲ）学校という私塾の訓導となり、明治十二年（一八七九）十二月に三十一歳で死亡。その後、東京に残された一人息子の孝太郎・義孝が箱田に迎えられ養母つねに育てられた。義孝は小学校教師を歴任し五十三歳で病死。十六歳で両親を失った義一氏は一時有力者の根井家に養育され、その後公務員を全うする傍ら祖先ゆかりの地を歴訪、八十

にも拘わらず、嘉永五年（一八五二）九月、病により急死する。葦原檢校の落胆は、察するに余りある。これにより、次男・金之丞を惣領とし、この年十二月に將軍御目見えを果たさせ、安政三年（一八五六）十一月に大御番への御番入りとなる。葦原檢校は、幕府より武器用意のため拝借金を請け家臣たちの具足を調べ、晴れて木曾家再興を果たし、金之丞・義久が講武所の銃隊にて出精する姿を見守りつつ、病没した。

『木曾氏家禄』はここで記述が終わる。この『木曾氏家禄』は、葦原檢校が祖先の事跡を綴らせたものに、自己の足跡をま

二歳で没。現在の三十二代当主・義久氏は義一氏の長男で、木曾家墓所を守っている。

四、「木曾三柱神社」にある検校の座像と掛け軸

群馬県勢多郡北橘村字箱田にある木曾三柱神社には、葦原検校の座像および肖像の描かれた掛軸一卷が存在する。¹⁹⁾

座像は、丈は一尺七寸五分（高さ五二・五cm×幅三四cm）あり、奥行一尺七寸、幅一尺九寸五分、高さ二尺四寸の両開き朱塗り厨子に安置されている。帯刀し、右手に扇子を持ち、笹龍胆の紋付を羽織り、堂々たる威厳を放つ姿は、既に帯刀免許を得て奥医師となった後の、天保九年四十二歳の時の物であろう。『木曾氏家禄』には、「為除厄針治門弟中木像造立之」とある。神社所蔵貴重重品由来によれば、作者は信濃国善光寺仏師・村上刑部で、幕臣木曾義久（金之丞）が奉納したとある。



写真 4

そのほか、幕臣木曾義寛（秀太郎）の奉納した直筆の「神号表」「祈願誓書」も存在し、木曾家再興時の葦原家と箱田村との関係の深さが偲ばれる。

掛軸は、長さ一七六cm×幅五〇・八cmのもので、桂寿隆泰の描いた肖像画である。いつの時点のものかは不明だが、長刀・短刀を帯び、正座し些か背を前に屈めた姿は、木像よりは晩年に近いものであるうか。葦原検校は目は見えなくても、刀剣の鑑定には長じており、「手で剣を触れて百発百中その系統および作者を当てた」と伝えられている。²⁰⁾

五、松代「虫歌観音堂」で発見した検校二十六歳の木像

長野県長野市松代町豊栄の虫歌山中腹に虫歌観音堂がある。松代は、真田昌幸の嫡男・信之（真田幸村は次男）が開いた城下町である。真田家は『寛永諸家譜』によれば、「清和天皇」の流れをくみ、木曾義仲が「清和源氏」の流れであることから「清和の皇別」という点で同じ系統に属す²¹。そのような関係もあつてか、葦原検校は若き頃から第七代松代城主・真田弾正大弼幸専に随従して、松代の地をしばしば訪れた。真田家との関わりは、『木曾家略譜』に「文化七年真田前侯（右京大夫幸弘殿也）ニ出入ヲ得タリ同十一年ヨリ真田弾正大弼殿エ謁ス」とある。すでに十四歳にて、鍼治を以て真田家に入入りしていた訳で、その俊才ぶりが窺える。真田幸専は至つて鍼治を好んだようである、江戸より信州へ帰る際には必ず葦原検校を伴わせた。



写真 5

文政六年（一八二三）に葦原検校は四度目の松代行きをする。この時、広く里人に鍼治を施した。『木曾氏家禄』には、「療ヲ受ル者凡五千人ニ及フ是ニヨツテ里人ヲ恩徳ニ報ルノ為木像ニ作（此年英俊一廿六歳善光寺仏師村上刑部ノ作ナリ）同国虫歌ノ観音ノ堂内ニ安置ス」と記載がある。この記載を基に松代を訪れたところ、虫歌山桑台院という信濃第七番観音札所霊場があり、「虫歌観音堂」と通称されていることが分かった。天文十三年（一五四四）に真言宗福德寺六世の僧快雄法印が建立したといわれる。境内には正徳四年（一七一四）作の立派な仁王門が

あり、天保六年（一八三五）に再建された舞台造りの拝殿がある。本堂は安永四年（一七七五）に消失した。現在は無住であり福徳寺が管理している。

葦原檢校の木像は、格子戸で閉ざされた拝殿の奥に安置されていた。右背部に「朝日將軍義仲二十六代孫芦原檢校幼名造酒太郎木曾源義長本年二十六歳」、左背部に「文政六癸未四月日」と刻まれている。高さ約六十cm×幅約六十五cmの寄木作り、奥行約七十cm×幅約八十cm×高さ約十cmの木製台座に座す。²²塗料は既にほとんど剝落しているが、紫衣赤紫素絹白練袴を着し、燕尾帽子を冠した檢校の装束姿であり、背筋を伸ばしふくよかな頬の輪郭の中に凛々しさと優しさを感じさせる面貌は、二十六歳の様相をよく伝えている。『木曾氏家祿』の記載からは、箱田の木像と同じく善光寺仏師村上刑部の作であり、容姿の表現、大きさ、形式ともに類似している。

六、大津「義仲寺」に建立した「朝日將軍木曾源公遺跡之碑」

大津市馬場一丁目にある義仲寺は、木曾義仲の墓と松尾芭蕉の墓があることで有名であるが、この義仲墓の脇には、葦原檢校が建立した「朝日將軍木曾源公遺跡之碑」がある。碑石は高さ一七〇cm×幅一五三cmの自然石であり、高さ四三cmの台石の上に建てられている。上部には「朝日將軍木曾源公遺跡之碑」と大書され、その下に三〇行、計一五二二文字の碑文が刻まれている。内容は、第一段にて、平氏討伐後の木曾義仲と源頼朝との宿命的対決を、秦朝滅亡後の楚末裔の盛衰の歴史を記述し、葦原檢校に至って將軍拜謁が適い侍医となったのも祖先の恩徳によるとし、碑石建立に至った経緯を述べる。第三段は、義仲が粟津ヶ原に散つて後、時代は変転し墓所も荒れ果てたが、綿々と遺系存続しここに祖靈を明祀する感激の漢詩である。碑文は大学頭林衡（述斎）、漢詩はその子である左近大夫躰林の作であり、書字を男谷彦四郎忠孝が、題額を第八代松代城主の真田幸貫が、彫字を窪世昌が担当した。また、碑文中の家系順序は漢字



写真 6

者・井田信斎が確定した。

その経緯は、『木曾氏家禄』中に詳しい。木曾家祖先の顕彰を図らんとする志厚かつた葦原檢校は、まず義仲最後の地である粟津ケ原の義仲寺境内に義仲の顕彰碑建立を企画する。その「一念発起」は、文政十二年（一八二九）に岸村檢校の病死により当道座坊主の座を受け継いだ頃に始まる。準備としてこの年夏、大石を豆州根府川より採取し、碑文を林大学頭に乞い、書字を男谷に依頼。その後様々な手配を行ない、天保五年（一八三四）九月になって「兼て発起せし処の江州粟津義仲寺境内に囊祖宣公遺跡碑

石起立大願成就了」。「経営布置して漸今年に至り成就す其事凡石井至穀主に委て功なれり」とある。

粟津まで碑石を運搬する作業は、極めて困難だったらしい。江戸廻船問屋に依頼し大坂まで船で運び、大坂町奉行や駿河守家臣の助力にて、淀川から京都高瀬川へ引き上げ上陸。三条べり日野岡越大津より粟津まで牛車にて運んだ。台石は江州の国石を用いて築き、工匠が碑石を据え終わったのは九月十六日だった。『木曾氏家禄』には、これにかかった細かな金額の明細まである。

義仲寺の由来を大津郡代・石原清左衛門が回答した件がある。²³⁾「義仲寺儀はむかし宣公の遺骸を葬りし所なれとも朝臣不計き朝敵の悪名を得玉ひし後は鎌倉幕府の時めける勢ひのみにて跡弔ひ奉る人もなけりけるに朝臣の愛妾巴女か妹某といふ女尼となりて爰に來り草庵を結び花摘あかくみて纒に供養し奉れり其後巴女また尼となりておなしく此所に來り住し公の御とふらひを勤其後また爰に身罷り故に中むかし迄は巴寺と称せしよし今の義仲寺と称替しは全三百年内外

の事のよしされは元來草庵に等しき寺院にて寺産も乏しく何宗と申宗派も定らすありしを今は三井寺の持分となりて天台宗門に定り正しき一寺とは成たるよし依之本寺三井寺へも掛合有之所故障も無之旨答申來」という。粟津から信濃へ落ち延びた巴御前のその後については諸説あるが、これもまたひとつの逸話であろう。義仲寺の一角に巴塚がある。

七、東京都世田谷区大蔵にある源義賢墳墓と石碑

次に葦原檢校は、木曾義仲の父である源義賢の墓所の整備と石碑建立を図った。天保八年（一八三七）八月のことである。

久安元年（一一四五）、源氏の頭領・源為義の次男・義賢は在京時代は帯刀先生の職にあつたが、職を辞して関東に下り、武蔵国大蔵の地に進出し上野・武蔵に勢力を拡大した。久寿元年（一一五四）大蔵館にて小枝との間に儲けた男

子が、駒王丸こと後の木曾義仲である。しかし久寿二年八月十六日、源義賢は兄義朝の長子・義平に急襲され、白刃の下に憤死する。小枝と駒王丸は、敵將・畠山重能の温情により木曾に逃れることになる。その後、義賢非業の最期の地を知る人も少なかったという。

『木曾氏家祿』には、「古墳者在武州多摩郡世田谷領大蔵邑農民清水総右衛門家側（從江戸三里半）往昔君住大蔵館久寿二年為悪源太義平被亡因埋蔵此所其跡隱滅里諺竊伝耳此頃齊藤氏著江戸名所図会記其事跡而世普至知之」とある。石碑の石は、「粟津の碑」と同じく豆州根府川の石を



写真 7

用いた。この文を頼りに、地図と見比べながら探索したところ、世田谷区大蔵六丁目の民家の庭に、今も大切に保存されている墳墓と石碑を発見した。

墳墓は、直径約4m高さ約1mの円形土盛りである。周囲に低木を植え、石畳を配し、墳墓の上に石碑が立っている。石碑は幅八四cm×高さ一〇六cm×厚さ二七cmの自然石で、表には篆文にて「源義賢朝臣墳」、裏に七行・七十四文字の碑文が刻まれている。曰く、「清和帝九世裔春宮帶刀先生君久寿二年乙亥八月十二日終于此所事審史星移遙六百八十有三霜今茲天保八年丁酉八月立石標之 廿七世雲孫 西城侍医兼檢校 芦原英俊一義長」とある。これにて『木曾氏家祿』記載の事実たることが確定した。

また『木曾氏家祿』は、「地主清水総右衛門方江金壹両贈之以子金墳之巡竹垣永代可修補之旨契約之券書有之」という。古墳の南約二十mには氷川神社があり、祭神五座の外に二座が祀られている。その二座が義賢と義仲である。木曾家末裔の一流である大石家が祭っていたが、碑石建立当時、既に嗣孫が絶えている。

八、旭市「東漸寺」に伝わる『慕香和歌集』一軸と板木

千葉県旭市（旧旭町）は、明治二十二年に網戸村と三つの村とが合併して誕生した。「旭市」の命名の由来でもあり市のシンボルともなっているのが、木曾義昌である。義昌は、義仲の十九代目に当たる後胤で、戦国時代に武田、織田、徳川、豊臣の家臣団に加わり、天正十八年（二五九〇）小田原北条攻めに参戦した後、徳川と誼のある勢力を関東へ遠ざけんとする秀吉の意向から、信濃美濃近江にわたる領地を取り上げられ、下総網戸一万石へと移封された。文禄四年（一五九五）三月十七日、義昌は五十六歳で波乱の生涯を閉じる。遺骸は「椿の海」に水葬されたといわれ、墓石のあるその地は「木曾義昌公史跡公園」となっている。法名、東漸寺殿玉山徹公大居士。木曾家は、義昌の子・義利の代で改易となる。

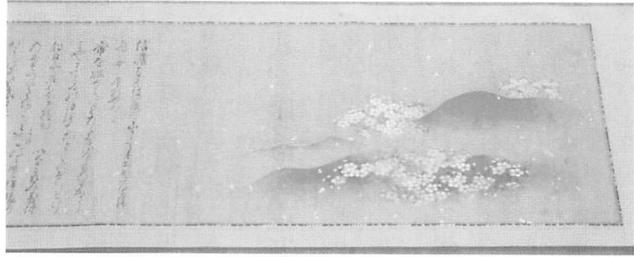


写真 8

卷子本『慕香和歌集』一軸

葦原検校は、義昌の二五〇回忌に当たり、天保十五年（一八四四）三月十七日、菩提寺・東漸寺において追善供養を為し、「寄花懐旧」の題にて諸侯および関係者より和歌を勧進、集めて一書と為し、東漸寺に納めた。名付けて『慕香和歌集』という。巻頭に藤原（斎藤）彦麿序、源宜温書字、巻末に木曾義寛跋がある。この中には全部で一九〇首の和歌・七言絶句・五言絶句を所収する。東漸寺には、今も大切に『慕香和歌集』一軸が保管されており、市の指定文化財となっている。

卷子本（縦三八cm×横二二m八二cm）。巻頭には木曾の山並に桜花の咲き誇る彩色画を配す。巻末には「天保甲辰姑洗 木曾義寛」との後、「集中 六十四翁 休齋書」「製造 大崎甫救」と記載がある。

袋とじ『慕香和歌集』一冊

弘化三年（一八四六）、葦原検校はこれを出版に移す。『木曾氏家禄』弘化三年の項には、「同六月十三日去閏五月学問所江伺 一 勧進慕香和歌集稿 巻冊 右出版ニいたし度候依之此段相伺申候以上 午閏五月 寄合医師 芦原玄道 下ケ札 開板被告候 追而出来之上宍部学問所江可被相納候事」とある。こうして出版されたものが、嫡男・木曾義寛の編になる『慕香和歌集』（国立国会図書館所蔵）である。内容は前記一軸とほぼ同様であるが、和歌の数は一八八首で、「再進并追加之部」所収の最後の二首が不足している。

「帝国図書館蔵」の空押のある後補表紙（一八・二×二七・二cm）。五つ穴袋とじ。左上部に貼られた題簽に「慕香和歌集」と墨書。銀色波目模様紙のもと表紙の左上にも同様の表題がある。本文の前後に一葉ずつ副紙があり、本文は

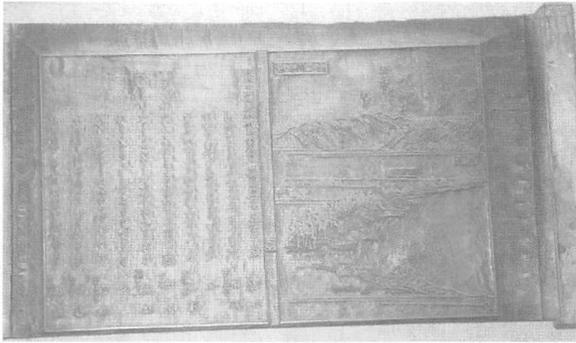


写真 9

和紙で全二十四葉。第一〜四葉は藤原彦磨の序、第五〜二十二葉表までは「慕香和歌集」の巻頭表題で始まり、和歌一六七首・七言絶句六首・五言絶句一首を収める。第二十二葉裏〜二十三葉は「再進并追加之部」と題し、和歌十三首・七言絶句一首を収める。和歌の部分には、「天保甲辰姑洗 木曾義寛」との刊記がある。第二十四葉は木曾義寛の自跋である。跋の最後には「木曾義昌廟所図記」一冊

袋とじ『木曾義昌廟所図記』一冊

嘉永四年（一八五二）下総網戸村役人・与五右衛門と東漸寺檀中世話人・六郎兵衛の連名で葦原玄道宛に書状が届いている。それによれば、①網戸にて編纂した「定雄編木曾殿御旧誌之巻」の詩歌加入の分を、葦原家に添削してもらい定雄に渡したこと、②都合二百冊ばかり製本したが、雑費も相当掛かり借金したこと、③『慕香和歌集』一軸に対し、その後追加した詩歌も新たに巻物一軸としたため、積立金も不足しており、右「定雄編」の彫刻料を助成してほしいこと、が記されている。こうして出版されたのが『木曾義昌廟所図記』と外題された本である（国立国会図書館蔵）。

「帝国図書館蔵」の空押のある後補表紙（二八・八×二五・九cm）。五つ穴袋とじ。左上部に貼られた題簽に「上総網戸東漸寺 木曾義昌廟所図記」と墨書。桜色横縞目模様紙のもと表紙左上部にも題簽が貼られ同様の墨書がある。扉表面には「旭將軍」と題する秋巖（萩）原禪書の七言絶句を配する。本文三十一葉。四周单边（二六・五×二一・二cm）。版心に葉数を示す漢数字がある。第一・二葉は東漸寺由来と木曾家代々・当寺代々の名録（楷書と変体仮名文）。

第三～六葉は「朝日將軍木曾源公遺跡之碑」文（楷書漢文）、葦原檢校が粟津に建立した碑の摺本を東漸寺に奉納したことによる。第七～十六葉は卷子本『慕香和歌集』所収の和歌と絶句に新たに八首を補ったもの。第十七～二十九葉は「定雄」が編集した後の追加分で、佐倉藩や地元周囲の名士の和歌・俳句・絶句一六二首および定雄の長歌を所収する（以上、草書と変体仮名文）。第三十～三十一葉表面は無有庵松仕の跋（草書と変体仮名文）。跋文の最後に「嘉永四辛亥花見月」、および「無有庵」「松仕」の印がある。また別に洪井氏の朱色藏書印がある。なお本文中には五種の色彩版画が配されている。①海上郡網戸全図、②東漸寺鐘之図、③御墓之図、④御廟之図、⑤慶長沼之図である。最後の「慶長沼之図」の左下には「応需如集写」の語が記され、「朝風」の篆刻印が彫られている。作者名は明示されていないが、長歌の表題に「其図を画きてよめる長歌」とあるので、定雄なる人物の絵を版下にした絵であろう。

東漸寺にはこの『廟所図記』の板木三十一枚がそっくり保存されている。網戸村および旭市では義昌公の遺徳を偲び、この板木を基に明治四十四年と大正三年そして平成四年の三度にわたり、『波布里集』として復刻している。表題の由来は、無有庵松仕の跋文中に「信濃路にありと聞風の祝と云ものは木曾路の花に風をいとひてのおこなひなるよしからんには此標題を風のはふりとも名つくへけれど略してははふり集とも呼へし」とあることによる。

九、葦原檢校の年譜

- ・寛政九年（一七九七）四月十一日、江戸桜田に誕生。
- ・享和三年（一八〇三）、七歳の時、麻疹にて失明。当道座・岸村檢校に入門。
- ・文化七年（一八一〇）、松代藩侯・真田幸弘に出入。
- ・文化十一年（一八一四）、真田幸専に拜謁。真田家より扶持を与えられ衆分となる。
- ・文化十二年（一八一五）六月二十四日、師・坂幽玄法眼より鍼術免許。

- ・文政三年（一八二〇）五月、当道座内の官位進み勾当となり、葦原姓を名乗る。
- ・文政四年（一八二二）十月二十六日、検校となる。
- ・文政五年（一八三二）松代城主より二十人扶持を賜り溜池の松代藩邸に住み、江戸にて広く鍼治を施す。
- ・文政六年（一八三三）一月、四度目の松代行きにて広く里人を治療し、五千人に及ぶ。里人ら感謝し葦原の木像を作り、虫歌観音堂内に安置。
- ・文政七年（一八二四）一月二十四日、尾州御館に鍼業を以て出入。
- ・文政九年（一八二六）二月、一橋儀同侯を治療。十月二十四日、紀州御館に鍼業を以て出入。
- ・文政十二年（一八二九）四月、火事にて類焼、家財悉く消失。赤坂大沢に家作。この年、坊主・岸村検校病死により門中の者皆、葦原検校の弟子となる。
- ・天保二年（一八三一）七月、『鍼道発秘』を著す。十二月一日、登城し將軍・家斉公および内府様に初めて御目見。
- ・天保三年（一八三二）九月十四日、奥御医師並および大奥御用を仰付られ、二十人扶持を賜る。
- ・天保四年（一八三三）五月、赤坂大沢町屋敷の新規家作成就。六月二十七日、帯刀免許を得る。十二月二十三日、御番料・稟米百俵を下される。
- ・天保五年（一八三四）九月十六日、江州粟津義仲寺に木曾義仲遺跡碑を建立。
- ・天保六年（一八三五）六月二十五日、江戸にて全ての検校上座たる旨仰付らる。
- ・天保七年（一八三六）二月二十三日、火事にて類焼し、谷町南府阪の真田藩中屋敷に仮寓居。十一月十一日、普請した大沢町屋敷に引移る。十九日、奥医師を仰付られ二十人扶持を加増。
- ・天保八年（一八三七）三月二十六日、惣領・木曾秀太郎元服。八月、元祖帯刀先生源義賢君墳墓を整備し石標を造立。十二月二十八日、赤坂新町一丁目に二二〇坪余の町屋敷を拝領。

・天保九年（一八三八）、葦原四十二歳にて厄除けのため、鍼治門弟ら木像を造る。
 ・天保十年（一八三九）九月十八日、家斉公が類中風にて御不例、葦原は詰切り鍼治し頗る効験あつた。十二月十八日、法眼位に叙せられる。

・天保十一年（一八四〇）八月二十一日、家斉公が再び御不例、腫氣の容態にて泊御番にて鍼治を勤める。九月十六日、四十人扶持から二百俵高・御番料二百俵に加増。

・天保十二年（一八四二）一月晦日、家斉公が薨御。二月二十二日、御本丸御医師を仰付らる。九月十六日、体調不良につき奥御奉公御免、寄合医師となる。当道座を離れ葦原源道と名乗り表法眼席に加わる。門人らは梅田検校に譲る。

・天保十五年（一八四四）三月十七日、下総網戸東漸寺にて祖先・木曾義昌朝臣二百五十回忌追善供養、『慕香和歌集』を勧進。

・嘉永三年（一八五〇）四月十八日、上野国勢多郡箱田村より木曾旧臣・根井五郎左衛門が来る。

・嘉永四年（一八五二）一月十九日、惣領秀太郎の御番入願書を提出。

・嘉永五年（一八五三）九月二十二日、秀太郎病死。菩提所・妙像寺に埋葬、法名「皎月院殿」。十二月二十五日、家慶公に惣領金之丞御目見。

・嘉永六年（一八五三）七月二十二日、家慶公薨御。

・嘉永七年（一八五四）三月二十日、金之丞が木曾明神参詣のため出府、根井五郎左衛門が同道。今井善兵衛宅へ止宿し、根井・今井他の武芸見分。

・安政二年（一八五五）七月十一日、鍼治門弟らの世話にて、菩提所・鳴子常円寺境内に葦原義長石碑を建立。

・安政三年（一八五六）十一月十二日、惣領金之丞が大御番入り、御切米二百俵。

・安政四年（二八五七）五月より体調不良のところ、十一月五日、葦原玄道病死。二十九日に鳴子常円寺に埋葬、法名「二心院殿前侍医兼中務卿法眼方法日新居士」。

十、葦原檢校の系図

清和源氏略系図

（平忠致に討たる）

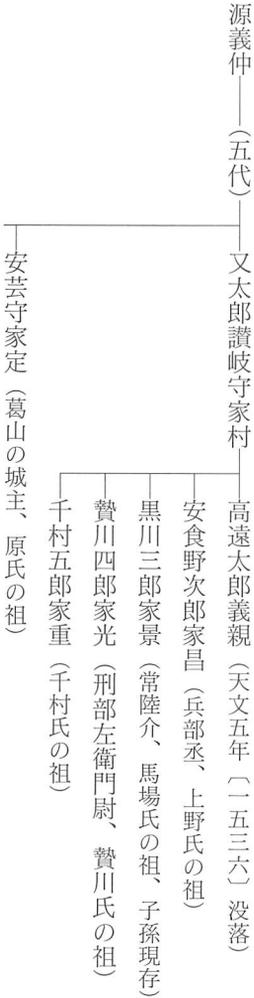


（大蔵館で討死）

木曾家略系図（『木曾家略譜』による）

（①征東大將軍）

（⑦信州江州を所領）



安芸守家定（葛山の城主、原氏の祖）

千村五郎家重（千村氏の祖）

費川四郎家光（刑部左衛門尉、費川氏の祖）

黒川三郎家景（常陸介、馬場氏の祖、子孫現存）

安食野次郎家昌（兵部丞、上野氏の祖）

高遠太郎義親（天文五年〔二五三六〕没落）

(⑧) 家村養子、家督を継ぐ

(⑩) 武田信玄と和順 (⑪) 下総網戸に移封

七郎伊予守家道——(九代)——木曾中務大輔義康—義昌—義利 (⑫) 改易

葦原検校の家系図 (『木曾氏家祿』および田屋久男著『木曾義仲』による)

第二〇代・木曾仙三郎義利——改易後、薙髪して「宗屋」と号し伊予松山に住す。寛永十六年(一六三九)卒。(田屋は「寛永十七年」とす。) 法名、生涼院殿三宿宗屋。

第二二代・木曾玄蕃義辰——旗本取立て願い適わず、寛文三年(一六六三)一月十三日松山にて卒。法名、永昌院殿一宝家剣。

第二二代・木曾玄蕃義徳——旗本取立て願い適わず、寛文六年(一六六六)江戸に出、延宝五年(一六七七)美濃寺川戸に住す。出水にて家財流失。尾州侯に奉公願い奉りつつ延宝九年(一六八一)四月七日卒。法名、慈峯院殿夏雲宗奇。⁽²⁵⁾

第二三代・木曾数馬義近——神谷氏の子、婿養子となる。尾州侯に勤仕、八百石。享保元年(一七一六)八月二十五日卒。第二四代・木曾右仲義敦——家督を継ぐ。享保末頃、故有りて浪人となり、元文四年(一七三九)二月六日卒。

第二五代・木曾玄蕃義忠——劍術師範となり、家再興の志適わず、天明二年(一七八二)二月二日大和にて卒。〔略譜〕『由緒書』は宝暦三年(一七五三)とする。〕

第二六代・木曾忠大夫義富——劍術師範として諸国を遍歴。家再興の志適わず、文化元年(一八〇四)江戸にて卒。義富の子が、葦原検校である。

葦原検校の子孫

(第二七代)

葦原玄道義長——木曾秀太郎・義寛(一八二五〜五二年、二十七歳で病死)

——石川三之助↓忠義(石川貞市の養子後、病により帰家し一八五三年に没)

(第二八代) 木曾久次郎・忠義↓金之丞・義久(一八三〇)〜六四年、三十五歳で病死)

義女↓吹子(一八三二)？、弘化四年、紀伊家奥に仕え「千茂」と改称)

木曾鉄三郎・義信↓駒之助↓賢次郎(一八三四)〜五四年、二十一歳で病死)

木曾信四郎(一八三六)〜三八年、二歳で病死)

木曾鉄五郎(一八三八)〜四三年、五歳で病死)

木曾六之助・義方(一八四九)〜七九年、三十一歳で病死)

(第三〇代) 木曾孝太郎・義孝(二八七六)〜一九二八年、五十三歳で病死)

(第三一代) 木曾義一(一九一三)〜九五、八十二歳で没)

(第三二代) 木曾義久(一九三八)〜現在)

十一、葦原檢校の周囲の人々

①鍼術の師匠

1、金子勾当——当道座中の鍼医で、おそらくは杉山流鍼術であろうが、不明。

2、村井快悦——当時、江戸で名の知れた鍼医であろうが、不明。

3、坂幽玄——鍼医の坂家は、初代・坂忠存に始まる。三代目・坂寿三幽玄は、幕府に初めて鍼医として登用され、家光に仕え治療にあたっていたことで有名である。葦原檢校に鍼術免許を与えた師匠の「坂幽玄法眼・奥御医師」は、九代目・坂友昇春達幽玄のことと思われる。安永九年(一七八〇)に二十二歳で奥医師となり、天明五年(一

七八五)に法眼に叙せられている。⁽²⁶⁾葦原に免許を与えた年「文政十二年」(二八一五)には五十七歳だった。また、その子である十代目・坂友尚春達も、後に玄道↓幽玄と名乗ったとみられ、文化八年(二八一二)に奥医師、文化十三年に法眼となっている。⁽²⁷⁾但し幽玄を名乗ったとみられるのは天保四年頃である。葦原の師匠に当たるのは、友昇または友尚ということになる。さらに十一代目・坂春達は、葦原と同じく天保十年(二八三九)に法眼に叙せられており、葦原の名代を務めてもいる同僚である。なお葦原が「玄道」と名乗ったのは天保十五年からであるが、すでに坂友尚が父の号「幽玄」を名乗っており、以前の号「玄道」を葦原に譲ったのではなからうか。このことからも、葦原檢校の鍼術には、坂家の鍼術の影響が色濃いものと思われるが、坂家の鍼書は残されていないゆえ言及できない。

②葦原檢校の門人

1、梅田檢校——天保十二年九月十六日、葦原檢校が当道座を離れたことにより、弟子たちは門人の梅田檢校に託された(『木曾氏家禄』)。

2、俊迪——天保三年に葦原檢校が奥医師となった時、和歌を贈った門人。

3、栄喜——天保十五年の『慕香和歌集』中に「葦原門人」として和歌あり。

4、喜久——『慕香和歌集』中に「葦原門人」として和歌あり。

5、義実・中崎俊益——『慕香和歌集』中に「葦原門人」として和歌あり。

6、三芳野檢校——『根井行雄伝』(二二頁)に、「葦原法眼の門弟に、三芳野檢校というやはり盲の鍼医が居た。この人は川越の出身であったが、三芳野の子は沼田一斎といい、之は眼あきの普通の医者で、川越侯松平大和守の臣となっていた。松平氏は川越と前橋との両城を持っていたので、沼田一斎も永く前橋に居住していたのである。しかも一斎は文才に富んでいたため、早くから箱田村の根井行雄はその門に出入し、一方には医学を学び、一方には

文芸の友として之と交わっていたのである。斯様な関係から、いつか行雄は江戸に新に木曾氏が興り、將軍旗下の一人に加わった事を聞いたのである」とある。

③葦原家臣

1、村上金吾・義周——『慕香和歌集』（天保十五年）中に「葦原臣」として和歌あり。

2、岡田半助・昌春（芳之丞）——『慕香和歌集』中に「葦原臣」として和歌あり。弘化二年と嘉永四年、六年の頁に所出。

3、樋口甚平——嘉永二年と四年の頁に所出。

4、野尻十右衛門——嘉永四年の頁に所出。

5、今井善兵衛・隼人——『根井行雄伝』（二二頁）によれば、嘉永四年に根井の紹介にて葦原檢校に目通りし、木曾家の希望により前橋藩家臣の藉を抜いて木曾家の執事の如き役目をしたという。『木曾氏家祿』には、嘉永五年、六年、安政四年の頁に所出。

6、桜木誠之助——嘉永七年と安政三年の頁に所出。

④將軍家への治療

1、公方様（徳川家斉）——天保十年九月十八日、家斉が「類中風」にて病床に伏した際、葦原檢校は十六日間詰切り鍼治を施した。この時、頗る効験があつたとして、法眼位に叙せられている。その後も度々の卒倒に際し鍼治しているが、天保十二年正月七日の急変は重く、葦原檢校自身も寒熱に犯され家にて養生する間に、晦日に家斉は薨御した。

2、内府様（徳川家慶）

3、大納言様（徳川家定） 4、御台様 5、御簾中様 6、御子様方（初之丞様、治之丞様、照姫君様）

7、所々御守殿 8、御住居方

⑤葦原檢校の治療した諸侯

1、真田幸弘（右京大夫）——第六代松代城主。元文五年（二七四〇）生まれ、十三歳で家督を継ぐ。藩政改革を断行した真田家中興の名君。『略譜』によれば、「文化七年（二八一〇）真田前侯ニ出入ヲ得タリ」とある。

2、真田幸専（彈正大弼）——第七代松代城主。井伊直幸の四男として生まれ、十六歳で幸弘の養子となり、寛政十年（一七九八）に家督を継ぐ。『略譜』によれば、「文化」十一年ヨリ真田彈正大弼殿エ調ス」（文政）五年真田侯ヨリ二十人扶持ヲ給フ。右、真田彈正大弼殿ハ至テ鍼治ヲ好テ葦原事モ度々信州エ罷越候」とある。

3、真田幸貫（伊豆守）——第八代松代城主。寛政三年（一七九二）に「寛政の改革」で知られる白河藩主・松平定信の二男として生まれ、文化十二年に幸専の養子となり、文政六年に家督を継ぐ。藩政を刷新し、文武学校を創設。佐久間象山ほか人材の登用に務めた。また、外様大名としては異例の老中となり、海防掛も兼ねた。天保五年建立の粟津の碑に「朝日將軍木曾源公遺跡之碑」と題額したのをはじめ、葦原檢校を死ぬまで補佐しつづけた人物。嘉永五年（一八五二）に隠居後、六十二歳で没。

4、一橋儀同治済卿——一橋家第二代当主。十一代將軍家斉の父として権勢を得、幕政に介入し、従一位准大臣に昇進した。『木曾氏家祿』によれば、「文政五年七月、一橋御館へ業を以て出入」「文政九年二月、一橋儀同殿へ御療治上る」とある。

5、徳川斉順——紀伊家第十一代当主で、將軍家斉の七男。文化十三年に紀伊家の豊姫と婚姻し婿養子となり、文政七年に家督を相続した。「文政九年十月二十四日、紀州御館へ出入し、鍼を致す」とあり、天保三年の鍼療諸侯中に「紀・尾二侯」とある。

6、徳川斉朝・斉温——斉朝は尾張家第十代当主。一橋治国の嫡子だが、尾張家へ養子となり、將軍家斉の長女・淑

姫と結婚。斉温は第十一代当主。文政五年に一橋家から尾張家へ養子入りした將軍家斉の子。「文政七年一月二十四日、尾州御館に鍼業を以て出入」とあり、天保三年の鍼療諸侯中に「紀・尾二侯」とある。

7、松浦静山——第三十四代肥前松浦藩当主。文化三年(一八〇六)に四十七歳で隠居してからも、二万石の所領を持ち、天保十二年(一八四二)に八十二歳で亡くなるまで、七人の女性に二十人の子供を生ませた。林大学頭述齋ほか当代一流の学者文化人と親しく交流した人物。二十年にわたる大随筆『甲子夜話』を著した。葦原檢校とも治療および刀劍鑑定を通じて関係が深く、天保四年に病状回復の謝礼として半弓を贈られたのをはじめ、天保五年には刀を贈られている。

8、天保三年九月記載の頁で、「鍼療の諸侯で分米を贈られた方々」として、○奥州盛岡藩・南部信濃守 ○勢州桑名藩・松平越中守 ○信州松代藩・真田伊豆守 ○上州館林藩御連枝・松平右近将監 ○下総生実藩若年寄・森川内膳正 ○薩州鹿児島・松平豊後守(本姓島津) ○肥前佐嘉・松平肥前守(本姓鍋島) ○伊予松山藩・松平隠岐守 ○備後福山藩・阿部伊予守 ○肥前松浦平石城主・松浦肥前守 ○奥州棚倉藩・井上河内守 ○駿州田中城主・本多豊前守 ○摂州三田・九鬼長門守 ○信州高遠藩・内藤大和守 ○丹波福知山・朽木隠岐守 ○周防徳山・毛利日向守 ○奥州八戸・南部左衛門尉 ○近江大溝・分部若狭守 ○因州新田・松平長門守 ○下野佐野・堀田摂津守 ○江州宮川・堀田豊前守 ○遠州相良の大納言様御側御用人・田沼玄蕃頭 ○尾州大山尾州侯家老・成瀬隼人正 ○越後糸魚川・松平日向守。

9、「天保五年春以後、列侯以上の療家」として、○駿州沼津執政職・水野出羽守 ○遠州浜松執政職・水野越前守 ○長州府中・毛利甲斐守 ○河州狭山・北条相模守 ○和州郡山・松平甲斐守。

⑥同僚の医官たち(『木曾氏家禄』に基づく)

1、杉本宗春院——天保七年二月二十三日の頁(同席)。

- 2、野間広春院——天保七年二月二十三日の頁（同席）。
——杉本、野間を始め「同席都テ五十人」とある。
- 3、吉田成方院法印——天保十年九月十八日の大御所様急御不例の際に、「御七法印成方院一番に出勤」とある。『続徳川実紀』には、その後、天保十二年五月、「吉田成方院咎められて奉公をめし放たれ、致仕して慎しみあるべしとなり」とある。
- 4、坂春達法眼——天保十二年九月十三日の頁（名代）。坂家十一代目で、天保十年に葦原檢校とともに法眼に叙せられている（『続徳川実紀』）。
- 5、森宗竹法眼——天保十二年九月十六日の頁（名代）。天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。森宗竹は天保八年に奥医となっている（『続徳川実紀』）。
- 6、半井出雲守——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。代々、典薬頭を継ぎ、一五〇〇石の家柄。
- 7、今大路右近——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。代々、典薬頭を継ぎ、一二〇〇石の家柄。今大路左京大夫の婿養子である右近は、天保七年に家督を継ぎ、嘉永五年に父の死に伴ない典薬頭を継いでいる（『続徳川実紀』）。
- 8、吉田意安法印——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。
- 9、竹田苞丸——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。『続徳川実紀』弘化元年三月の頁に、竹田苞丸が伝来の胴人形を医学館に収めたこと記述がある。『寛政諸家譜』によれば、先祖・竹田明室龜千代丸は明国にて医学を学び、帰朝の際に彩色本草その他の秘書および胴人形などを携え、天授四年（一三七八）に帰ったとあるゆえ、この胴人形をさすものか。

10、数原通玄法眼——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。嘉永五年十一月八日の頁(名代)。『続徳川実紀』には「数原玄英」の名で文化十四年に番医となっている。『寛政諸家譜』では、寛政二年に十三歳で遺跡を継いでおり、父・通玄元善の死後、通玄を号したのではなからうか。

11、杉本忠温法眼——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。瘍医である杉本は、寛政九年に西城奥瘍医となり、文化五年に法眼に叙せられている(『続徳川実紀』)。

12、栗崎道板法眼——天保十二年九月十八日当時、同席の医師名中に見える。奥医栗崎道有の養子で、文化二年に番外科として召し出され、天保十四年十二月の頁にも寄合医として名がある(『続徳川実紀』)。

——森以下栗崎までの八人に加えて、御画師の狩野晴川院法印、関東御歌所の北村再昌院法印および葦原源道法眼を含む十一人が同席であったという。

13、岡本玄治——嘉永五年二月二十八日の頁(名代)。岡本家も曲直瀬延寿院道三の弟子であった岡本諸品に始まる医家の名門で、代々「玄治」を名乗り「啓拙院」を号している。何代目に当たるかは不明だが、天保二年刊『鍼道発秘』序は、岡本玄治叔保が記している。

14、人見友雪——安政四年十月五日の頁(葦原病死御届の名代、「表法眼御医師」とある)。人見友説↓高栄の子孫と思われるが不明。

十二、葦原検校の和歌

○文化十年九月、川中島八幡参詣において神前に捧げた歌。

「ひたふるに頼む心の一筋を うけ取たまへ雲の上まで」

○文政三年五月、葦原勾当と号すに至り詠んだ歌。

「能ことをなせはむくひの誰か身にも めくり来るまのはやし世の中」

○文政三年十一月、夢に現われた天國稻荷大明神の祭事を行なつて詠んだ歌。

「千早ふる神は我家にやとりけり あまつ御国のあらんかきりは」

○文政四年四月、川中島八幡参詣において願書と歌を捧ぐ。

「梓弓 八幡の神に誓つつ（以下未詳）」

○文政四年十月、檢校に任せられ安國殿へ立願、百日間参詣し捧げた歌。

「安國の神にまかせて今よりは たた一すしに君にまみへん」

○天保二年七月『鍼道発秘』を著す。その「余論」中の古歌。

「仏にも神にも人は成るものを などあたにもつこころなるらむ」

「まよひにし心ひとつのひらくれば 智恵もなさけも有あけのつき」

「なせばなるなさねばならず成物を ならぬはおのがなさぬなりけり」

○天保三年九月、奥医師並を仰付られ二十人扶持を賜る。諸家より贈られた和歌に対する返歌。

「有かたさの余りに

事たらぬ身こそ安けれ世の中を 君にまかせてわたると思へは」

○天保十五年三月、木曾義昌朝臣二百五十回忌追善供養にて捧げた歌。

「めくり来てとふもうれしき桜花 ありし昔の香をしたひつつ」

○嘉永四年三月、『木曾殿御旧記』編纂に際し、追加した歌。

「さまざまに匂ふことはの花かつら ちらぬかさしと世々につたへむ」

十三、結 語

木曾家の系譜および葦原檢校の足跡は『木曾氏家祿』に詳述されている。今回の調査により、『家祿』の信憑性が確証され葦原の事跡が全面的に裏付けられたと確信する。葦原檢校は、幕末において鍼術をもって一盲人鍼医から將軍侍医にまで出世した実力者であり、零落していた木曾家再興を果たした稀有な人物である。その著『鍼道発秘』は、簡潔にして蘊奥を秘めた書として今も日本伝統鍼灸に示唆を与え続けている。

注および文献

- (1) 天保二年七月刊。葦原檢校著、岡本文治叔保序、信齋井田寛仁甫跋。天保五年三月刊のものには更に、退耕老人(井田赤城)の跋を付す。儒学者・井田赤城は信齋の父であり、葦原檢校の文学の師匠でもある。『鍼道発秘』は柳谷素靈がその真価を見抜き昭和十三年に油印本として復刻したが、影印本としてはオリエント出版社より『鍼灸流儀書集成・第十冊』(一九九七年刊)に収められている。また解説本としては、横田観風著『鍼道発秘講義』(平成三年一月、医道の日本社刊)が知られている。
- (2) 「医道の日本」第五九九号(平成六年七月号)「葦原檢校について」。
- (3) 「漢方の臨床」四八巻六号(平成十三年六月号)目で見える漢方資料館(二五六)「葦原檢校の事跡」。
- (4) 『木曾氏家祿』は、天・地・人の三巻から成る。この内、「地之巻」が葦原檢校の生い立ちから没年までの記述に当たる。和装本(一五三×二四〇cm)。本文は一二二葉からなる。本書は木曾家にある古文書中、最もまとまった記録である。この他に、『木曾家略譜』『由緒書』『御目見一件書留』『拝領屋敷図面』『義仲寺造碑一件』『義昌伝』がある。今回、木曾義久氏の御好意により再調査させて頂いたところ、「葦原君伝」、鳴子常円寺にあった墓碑の絵図および「葦原義長墓碑文」、「木曾家系図」などの発見があった。
- (5) 葦原檢校の当時の屋敷は、赤坂大沢町にあった。天保四年四月に屋敷地を賜り十一月に完成。見取図はこの拝領屋敷のもの

の。同七年二月の火災にて類焼し、一時谷町南部阪の松代藩中屋敷に仮寓居したが、十一月に再び大沢町の新居に移る。なお天保八年十二月には、新たに赤坂新町一丁目一ツ木通りに二二〇坪余の町屋敷を拝領した。これは町会所・商店および長屋として貸付けした様である。

(6) 『葦原君伝』および『墓碑文』に「七歳病麻疹喪明」とある。

(7) 『略譜』によれば、真田家への最初の出入は、文化七年（一八一〇）英俊十四歳の時である。

(8) 検校の父・木曾忠大夫義富は、初め清水氏を娶り検校を生んだが、後に離縁し葦原氏を後妻に迎えた。検校が当道座に入るにあたっては、剃髪し本姓を名乗らない決まり故、養母の葦原姓を名乗った訳である。養母のその後は定かではないが、実母は後に孫の島田半助とともに帰府し、弘化五年より検校が養い、嘉永六年四月十六日に八十八歳で死去した。

(9) 『木曾氏家禄』文政四年十月の頁。

(10) ぼうしゅ。当道座における師匠の呼称。

(11) 『木曾氏家禄』天保二年の頁。

(12) 『木曾氏家禄』天保四年の頁に、「六月廿七日御書付到来以来帯刀致スヘキ旨蒙仰古来ヨリ検校ニテ被召出者有ト雖モ帯刀免許ノ事今度ヲ初トス」とある。

(13) 惣録・山登検校の書付伺いに對し脇坂中務大輔より、江戸当地においては惣録の上座、京都十老の出府に際してもすべて葦原が上座たるべき旨、申し渡されている。

(14) 国会図書館には木曾義長編『木曾義昌廟所図記』と命名して所蔵、網戸村合併後の旭市では『波布里集』として大正三年に再版したものである。

(15) 木曾家文書を精査したところ、墓石を写した図および碑文を発見した。それによれば、墓石は、総高六尺四寸（一九二cm）、台石幅六尺（一八〇cm）、中央の靈龜石像の上に碑石を配す。碑文は碑石の左右側面および後面に彫られていたと考えられる。碑文は二二字×二一行、計四四〇字よりなる。別に、安政四年八月に赤坂正富が作成した「大府前侍医中務卿法眼葦原君伝」なる文があり、これを基に木曾金之丞・義久が訂正したものである。

(16) 木曾家の由来および再興に至る過程を記したものに、『木曾家略譜』および『由緒書』がある。『略譜』は長男・秀太郎の

筆になり、天保十五年四月四日の記述で終わる。『由緒書』は次男・金之丞の筆になり、天保七年二月二十三日の大沢町屋敷消失の記載で終わる。『木曾氏家禄』は一部秀太郎の筆跡もあるが、主に金之丞の筆になる。これらから、『由緒書』↓『略譜』↓『木曾氏家禄』の順に、書き整えられていったと考えられる。木曾家文書中に葦原檢校墓碑文の原本となった『葦原君伝』なる文書があるが、そこに「余(金之丞)与君(葦原)辱忘年之交嘗請記年譜而未果」とあることから裏付けられる。

(17) 今井善一郎著『根井行雄伝』は、昭和三十三年に「橘郷土叢書三」(北橘郷土研究所刊)として発行。現在『今井善一郎著作集・歴史文学篇』(群馬県・燠乎堂刊)中に所収されている。

(18) 元暦元年(一一八四)、木曾義仲が滋賀県粟津にて源義経に討たれた後、その遺臣であった今井・根井・高梨・町田・小野沢・萩原・串測・諸田等は、義仲が崇拜した信濃国筑摩郡の岡田・沙田・阿礼神社の三座を、群馬県北橘村箱田の地に勧進した。これが「木曾三社神社」で、義方は当初この神社の宮司となった訳である。後に有力者・根井行雄らは三社神社を離れ、新たに「木曾三柱神社」を創建した。葦原檢校ゆかりの品々は、この三柱神社により保存されている。

(19) その他に、葦原檢校の識語が書かれた掛軸三幅がある。これは木曾義仲の甲冑姿(中)および四天王といわれた楯六郎親忠と根井小彌太行親(左、今井四郎兼平と樋口次郎兼光(右)を描いた画像であり、毎年正月二十一日の義仲命日に、檢校がこれを掛けて祭った由来の品である。これを取めた桐箱の内側には「義祖宣公の像もとより家に伝へしは甲冑をよろひて床机に座し一幅のうち左右に樋口今井の二勇士従へり文化八年二月十一日祝融の禍にかゝりて失ぬ後に此三幅子山村勢州より模写して贈る処なり左の式人は楯根の井右は則樋口今井なり世に是を四天王といふ本書は木曾の興禪寺にありことし六百五拾霜の遠忌に当り表装呈修をくはふるものなり 天保四年癸巳正月廿一日 芦原檢校英俊一敬識」と墨書されている。

(20) 石川二三造編・文部省普通学務局発行『本朝盲人伝』(大正八年三月・東京)。葦原俊一の項に、「俊一年五十を過ぎ、能く劍を相し、手に之を撫でて乃ち曰く、某年某月某国某工の鑄る所なりと。毎に必ず的中す。時人賞して曰く、本阿弥光悦と雖も、或は及ぶ能はざらんと」とある。

(21) 『寛政重修諸家譜』第一卷一五〜一六頁、第十一卷五四〜五六頁。

(22) この台座の下は、更に松をくり抜いた大きな白木の台座であるが、後に木曾家文書中に発見した「義長木像ノ画書」により、この下台座は檢校許可色の浅黄色に塗られた御輿様厨子の土台の一部であったことが判明した。厨子は既に倒壊したら

しく、別の白木の台上に安置されている。

(23) 『木曾氏家祿』天保五年九月十六日の頁。

(24) 『木曾氏家祿』嘉永四年十月の頁。

(25) 木曾家文書中に「書取」と題し、木曾玄蕃義徳の石碑建立の件が記されている。それによれば、義徳は延宝九年（二六八年）四月七日に美濃寺川戸にて死去し久々利東禅寺に葬ったが、墓誌もなく後には不分明となるであろうことから、弘化四年（一八四七）二月、葦原検校は久々利家臣に依頼して、東禅寺に石碑を建立すべく金二兩二分を送っている。なお『由緒書』および『略譜』に「延宝七年四月卒」とあるが、これは伝承上の間違いであろう。田谷説および「書取」に従った。

(26) 『寛政重修諸家譜』第五卷二六七～二六八頁。

(27) 『鍼灸あんま史論考』（二九九六年六月、桜雲会発行）三二二頁。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）

A Short Biography of Ashihara Kengyo

Hiromasa OURA

Ashihara Kengyo was one of the most famous acupuncturists of the latter part of the Edo period. He wrote the book *Shindo Happi* on acupuncture theory. He was blind, but he was unrivaled when it came to acupuncture. As a result, he became the medical doctor for the feudal government and treated the shogun Tokugawa Ienari and many daimyos.

He was a descendant of Kiso Yoshinaka, who was a famous samurai of the Kamakura era. Thus he re-established the Kiso family name, and always held a service for his ancestors.

I investigated the history of Ashihara Kengyo, on the basis of the data I found on “Kisoshi Karoku”. As a result, I discovered a wooden statue of him and many related historical spots.